

NO.80 2007

東海体育学会会報

【東海体育学会】

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18 南山大学体育学教室内
TEL.052-832-3110 (5341) FAX.052-833-6985

[ホームページ] <http://wwwsoc.nii.ac.jp/tspe/>
学会事務局 [E-Mail] tspe@htc.nagoya-u.ac.jp

Society of
Physical
Education

杞憂

東海体育学会会長 寺田邦昭

「はたらけど はたらけど猶わが生活(くらし)楽にならざり ちっと手を見る」

ご存知、啄木の歌です。この春、渋民村を訪ねました。啄木が薄給の代用教員を勤めた渋民尋常小学校の薄暗い職員室に佇んだ折、何故か私は、現代における格差社会の実態に想いを馳せていました。ネットカフェ難民、ワーキングプア、ワンコールワーカーなど、貧困に喘ぐ人達の姿が時代を越えて啄木と重なり、いくら働いても報われない格差社会が広がりつつあることに、戦慄が走るのを覚えました。

何故、そして誰が、1億総中流社会や平等社会と云われた嘗てのよき時代を壊し、また壊そうとしているのかと、やり場のない腹立たしさ、やるせなさを禁じ得ませんでした。

バブルの崩壊以後、不況克服や国際競争力の向上、教育改革などを至上命題とした官邸直属の各種会議体に、財界人やジャーナリスト、タレントの人達が多く参画するようになり、その発言力も増してきました。先日もその一つ、教育再生会議が訓示した「親学」が物議を醸しましたが、この再生会議の一員である首相補佐官は、中央教育審議会を「審議にスピード感が無い」と批判し、中教審の改革を教育再生会議が提言すると豪語するなど、虎の威を借る狐どころか、虎になった猫と云った豹変振りに驚かされました。しかし教育政策に失敗は許されません。教育現場を無視した短兵急な施策は国益を損なうことにもなりかねず、審議には時間をかけ慎重を期して貰いたいものです。

ところで、大学等における構造改革・規制緩和は、当該教育機関が、より自主的、自律的にその機能を全うし得る様にと実施された筈です。しかしその実態は、理念に逆行している様に見受けられます。従来大学にあった研究教育に係わる企画・立案等の権限は大幅に縮小され、国や財界の政策に従属する傾向が強まって、自由で創造的な教育・研究の気風が失われつつあるように思われてなりません。

その象徴が教育基本法の改正です。新教育基本法では、大学の項を新設し、大学が社会の発展に寄与すべく教育および研究の成果を広く社会に提供することを法的に義務付けました。今後、この法を根拠とした産

官の大学への土足での踏込みが憂慮されます。

それはさておき、気になることが一つあります。それは1995年に日経連が示した「新時代の日本的経営」なる格差社会へのシナリオです。その経営手法とは、一握りの管理職や基幹労働者のみを終身雇用とし、残りを、昇給も退職金も年金も無い不安定な短期雇用として、総人件費やコストの削減を図ろうとするものです。経営側からすれば労使紛争を抑え、国際競争力を高める上では、おいしい話ですが、最近、矢継ぎ早に出される、「教育バウチャー制」「飛び入学制」「9月入学制」などの教育改革案を見ていると、教育の領域までもが、この日経連のシナリオに組み込まれ、差別化が図られているのではないかとの不安をすら感じます。

2002年に学校教育法が改正され、大学等の設置認可制度の殆んどは届出制になりました。そのため昨今は空前の開学ラッシュです。少子化が進む中でこの異常な状況、誰が見ても大学設置バブルが崩壊する日が近いのは明白です。先般、文科省は定員割れ大学に対して、追討ちをかける如く私学助成をカットする旨の発表をしました。文科省は自らの手を汚すことなく市場原理に委ね、存在価値の低い大学には自己責任で一刻も早く市場から消え去って貰い、一方では、COE(中核的研究拠点)を持つ、旧帝大など一部の優秀な大学や研究機関へ重点的に予算を配分して、管理職や基幹労働者等、エリートの育成を図ろうという戦略が見え隠れします。そしてまた、往生際の悪い教育機関には、いずれ天下りの温床になるやも知れぬ認証評価機関を通じて厳しく評価し、その結果を私学助成や競争的資金の配分、法令に定めた是正措置などに反映させ、生殺与奪の権を行使して、弱者を際限の無いRace to Bottomへと駆り立てるのでしょうか。

このような格差助長の施策は、若手研究者を研究能力の涵養や研究活動の活性化のためとして雇用しながら、35歳で路頭に放り出す「ポスト・ドクター制度」や、流動的で競争的な研究教育環境を創出するためと称し、教員や研究者を使い捨てにする「大学の教員等の任期制」、そして、職員の長期拘束と若年定年制を合法化した「労働基準法14条の改正」など、枚挙に暇がありません。そしてこれらは大学内に身分格差を生み出す

ばかりでなく、職場の人間関係をも悪化させ、教育機関としての品格すら奪い去るのではと懸念されます。

このような教育現場の混乱は、方向を誤った規制緩和と市場原理主義によってもたらされていると思われます。大学人が閉塞感を脱却し、想像力豊かな研究と、真に人を育てる教育が行なえるような環境を取り戻すために

【委員会報告】

企画委員会活動報告

平成18年度東海体育学会理事会における企画委員会では、過去2年間に実施されたセミナーのテーマ、「健康づくりの運動を科学する」を継承しつつ、平成18年度、19年度の企画内容の大きなテーマとして、「体育学・スポーツ科学のトピックを考える」を取り上げた。そして、平成18年度は講演会と東海体育学セミナーの2つを企画した。特に、7月の講演会としてのサブテーマは「中高年と登山-その神髄に迫る-」を掲げて、登山という究極的な生を求める活動から、現代人の忘れかけた人生観を再び考え直す機会が得られればと考えた。その中から、通常のスポーツ活動とはひと味違った、生を賭けた登山という活動の神髄を探りながら、体育学・スポーツ科学を見つめ直すことの重要性が問われた講演となった。講師は愛知学院大学の湯浅道男先生を招き、司会には名古屋学芸大学の正美智子先生をお願いした。講師のプロフィール、講演会の概要は後述した。

続いて12月に行われた東海体育学セミナーについて、サブテーマは「2006年ワールドカップサッカードイツ大会を検証する-敗因と未来-」を企画した。2006年6月、日本中をテレビの前に釘付けにしたワールドカップサッカードイツ大会であるが、前評判の割には日本サッカーは6月12日(月)、オーストラリアに1-3で敗北し、クロアチアに0-0の引き分け(6月18日、日曜)、ブラジルには1-4と完全敗北(6月22日、木曜)してしまった。様々に取り沙汰されているが、学会として専門的な立場からはっきりと検証する必要性を示したセミナーであった。講師はそれぞれの専門的な立場から、布目寛幸先生(名古屋大学)にはバイオメカニクスのアプローチ、松田保先生(びわこ成蹊スポーツ大学)にはユースサッカー指導の立場から、境田雅章先生(愛知学院大学)にはプロサッカー経験者としての立場からそれぞれ発表していただいた。司

は、Winner Take Allのアメリカ型社会への盲従から脱却しての、速やかな軌道修正が望まれます。

激動する昨今の教育・研究環境の混迷を憂い、老婆心から取り留めも無く書き連ねました。これらの全てが、杞憂として一笑に付されることを願うものです。

企画委員会委員長 藤井勝紀

会者としては鶴原清志先生(三重大学)にお願いし、3名の講師の方の発表をまとめていただいた。講演会の概要は後述した。

1.2006年度東海体育学会講演会

テーマ:中高年と登山-その神髄に迫る-

講師:湯浅道男先生(愛知学院大学教授)

司会:正美智子先生(名古屋学芸大学教授)

開催日時:7月1日(土曜日)午後3時~5時

開催場所:愛知工業大学本山キャンパスにて

【概略】

本講演会は、最近マスコミ等で良く取り上げられている「登山」をテーマに、登山という究極的な生を求める活動から、通常のスポーツ活動とはひと味違った、正に現代人の忘れかけた人生観を再び考え直す機会が得られればという目的から、1973年に非常に困難とされる秋のエヴェレスト登攀に隊長として成功させた愛知学院大学教授の湯浅道男氏を講師に招き、氏の壮絶な登山経験を講演していただいた。講演内容の詳細は後日の公表に委ねますが、講演会の概略について少し紙面を割かせていただきます。

先ず、湯浅氏の紹介にあたり、司会として湯浅氏を良く知り、女流登山家としても活躍している名古屋学芸大学教授の正美智子氏によって第一声が発せられた。氏のプロフィールは文末に示してありますが、正氏の紹介から思いがけない話が語られた。それは、井上靖の小説「氷壁」に登場する主人公、魚津恭太のモデルとなった奥山章氏は湯浅氏の先輩であるという話である。しかも1973年のエヴェレスト登攀にはその奥山章氏が隊

長として行く予定であったが、顎ガンで自殺したために湯浅氏が抜擢されたというエピソードが紹介された。「氷壁」は、今年の1月にNHKで4回にわたって放映されており、時代背景は異なるが、正に、「氷壁」を読んでいる者にとっては、この講演会は物語の始まりである。湯浅氏の語り口は、とてもエヴェレストを踏破した壮絶なまでの厳しさを生き抜いた登山家とは思えないほど、さらりとした口調で淡々と話された。まさに自然体でエヴェレストに行き帰ってきたという感じである。ここ2年間半は本務校の法科大学院設置のために忙しく、山に行っていないことを悔しそうに話された。話の中で、何度かテーマについて触れながら、若者も中高年も変わらないことを指摘され、気のあった信頼に足るパートナーを見つけることが重要であることを訴えられた。

ところで、話の節々に龍太郎という名前が出てきて、良く聞いてみれば元首相の橋本龍太郎氏のことである。実は、湯浅氏は「たかが山登りされど山登り」(成文堂)という本を書かれているが、この本の序文を橋本龍太郎氏が飾っている。元首相との出会いは1973年の秋にエヴェレスト南西壁登山隊の総隊長が橋本龍太郎氏、その登攀隊長が湯浅氏という縁になっていたようである。登山はお金が掛かるものである。ただエヴェレストに登るのではない。登るまでの準備、さまざまな苦難を乗り越えてやっとエヴェレスト登攀の緒につくのである。そして、エヴェレストに登って帰ってきましたとさらりと話し終えられた。正に自然体の登山、湯浅氏のお人柄が伺える講演であったように感じられた。

<湯浅氏のプロフィール>

1937年に生まれる。

早稲田大学第一法学部卒業、大学院修士課程を経て1964年4月より愛知学院大学法学部助手

同講師、助教授を経て、1976年より教授。1987年法学博士(神戸大学)取得。

法学部長、学生部長、大学院法学研究科長を歴任。

2005年4月より法務研究科長。

<登山家としてのプロフィール>

18歳から登山に没頭する。1973年、非常に困難とされる秋のエベレスト登攀に隊長として成功させる。以後これを含めて3度エベレスト登山隊長を務める。愛知県山岳連盟会長、日本山岳協会理事、日本山岳ガイド協会副会長を務めている。

2.2006年度東海体育学研究セミナー

テーマ:2006年ワールドカップサッカードイツ大会を検証

する -敗因と未来-

講師:布目寛幸先生(名古屋大学)

松田保先生(びわこ成蹊スポーツ大学)

境田雅章先生(愛知学院大学)

司会:鶴原清志先生(三重大学)

開催日時:12月16日(土曜日)午後2時~4時30分

開催場所:愛知工業大学本山キャンパスにて

【概略】

本セミナー開催に際して、本年度開催された2006年ワールドカップサッカードイツ大会は日本中をテレビの前に釘付けにしたワールド大会であったが、前評判の割には日本サッカーは6月12日(月)、オーストラリアに1-3で敗北し、クロアチアに0-0の引き分け(6月18日、日曜)、ブラジルには1-4と完全敗北(6月22日、木曜)してしまった。様々に取り沙汰されているが、学会として専門的な立場からはっきりと検証する必要があるのではないかと思い、このような企画が考えられた。

先ず、司会の鶴原先生から本セミナー開催の趣旨が説明され、続いて講師の先生方のプロフィールが簡単に紹介された。最初に登壇されたのはびわこ成蹊スポーツ大学の松田先生である。氏はユースサッカーにおいては第1人者の指導者であり、プロサッカー選手の井原選手を育てた人でもある。氏は先ず、ワールドカップサッカーの歴史について簡単に触れられ、日本がフランス大会から今回で3回目の出場であることを強調された。話が進むうちに、本テーマの敗因についてジーコ監督(松田先生のジーコ評は長島茂雄氏に例えられた)の采配はさておき、最も重要な初戦のオーストラリア戦に対して楽観しすぎた点にあること、つまり、戦略的にあまりにも丸裸の日本チームを相手に露呈させた点であることを説明された。我々聞き手はなるほど納得した。さらに松田先生は、新しいオシム監督についても話が及び、カードゲームが強く、日本びいきで、走るサッカーを提唱するオシム監督は、日本人としてのアイデンティティを誇れるサッカーを目指すことができるのではないかと結ばれた。これは松田先生も目指している指導体系の神髄と思われる。

次に、愛知学院大学の境田先生が登壇され、氏は現在の横浜マリノスの前衛である日産自動車サッカー部でプロとして活躍され、その後、名古屋グランパスエイトの強化担当推進部長として活躍され、多くの有名な国内、国外のプロ選手との交渉や監督との接点を力注いで

きましたが、現在は母校である愛知学院大学の教員としてサッカー部の指導をされています。今回のワールドカップサッカードイツ大会の日本の敗因は、やはり重要な初戦のオーストラリア戦を勝てると踏んだ悔みであり、大会前のドイツとの試合に2-2での引き分けた奢り、さらに初戦に対するコンディショニングの失敗を挙げられた。そして世界に通用するフィジカル、タフさを高めること、つまり走りまくるサッカーをし、したたかな判断力を持たなければ世界には通用しない点を強調された。

最後に名古屋大学の布目先生が登壇され、氏は名古屋大学でバイオメカニクス分野の研究に従事され多くの論文を発表されている。もちろん名古屋大学サッカー部の顧問でもあります。実は、氏の今回の内容は、*体育の科学* (Vol.56, p819-825, 2006)に掲載された内容を分かりやすく、さらに肉付けされて話された。今回のワールドカップサッカードイツ大会ではミドルシュートの得点が多かったことを冒頭で説明され、そのミドルシュートについてバイオメカニクスのアプローチされた成果を話された。まず、ボールに回転のないミドルシュートを蹴ると、空気抵抗による影響で予測できない拳動を生み出し、それがキーパーを翻弄する結果となり得点に結びつくという構図である。一見キーパーのミスに思えるようなボールであるが、実際ビデオで説明されるとボールの変化がよく分かり、なるほどと思われた。そして、実はこの原因が新しいボールになってから良く起きるようになったことも補足された。さらにはこのような回転のないフラットなボールを蹴るメカニズムまで説明され、その指導法まで言及された。特に、後ろで聞いていた学生達には非常に受けていた。

3名の講師の方の話が終わり、司会の鶴原先生からフロアの方に対して質疑応答が求められた。3名の講師の方に満遍なく質問がなされ、最後に本セミナーのまとめとして、司会者自身がマスコミに踊らされた1人であるが、学会として今回のワールドカップサッカードイツ大会の敗因と将来的な展望を検証できたことは有意義であった点を述べられて幕を閉じた。

以上、平成18年度は7月の講演会と12月の東海体育学セミナーの概要を認めた。平成19年度は6月に講演会を開催予定である。

3. 研究交流委員会活動報告

体育科教育学分野の活動報告(第1回体育科教育学セミナー)

報告者 丸山真司(愛知県立大学)

テーマ:台湾の体育カリキュラム(指導要領)改革と学校体育の現状

◇日時:7月8日(土)13:00~15:00

◇場所:愛知工業大学本山キャンパス(地下鉄東山線 本山駅徒歩1分)

◇講師:李勝雄教授(屏東教育大学体育学系)

李教授は、台湾における体育科教育学研究の第一人者であり、2000年に全面改訂された台湾の体育カリキュラム(指導要領)開発を手がけた人です。そこでは「9年一貫健康興体育領域」の内容を作り上げ、その内容は国立教育資料館発行のDVDに具体的な実践イメージとして描かれています。また、一昨年11月の日本スポーツ教育学会第25回記念国際大会のシンポジウムでは「台湾における体育科教育の改革動向」について報告され、国際的な議論を展開されています。名古屋大学大学院教育学研究科に在外研究で滞在中の李教授に、台湾の新しい学校体育の状況についてDVD映像を見ながらわかりやすく解説していただいた。また合わせて台湾の学校体育指導要領改革の動向についても貴重な情報を提供していただきました。参加者数は多くはありませんでしたが、現場の教師や大学院生も参加してくれ有意義なセミナーとなりました。講演終了後には近くの居酒屋で交流会をもち、親交を深めることができました。

運動生理学分野の活動報告

報告者 石田浩司(名古屋大学 総合保健体育科学センター)

まずお知らせですが、東海体育学会・運動生理学分野の世話人に関して、任期がはっきり決まっていませんでしたが、人事刷新も必要だろうということで、2006年7月1日の研究交流委員会の時に、下村吉治先生(名古屋工業大学)から富樫健二先生(三重大学)に世話人を交代致しました。もう一人は名古屋大学の石田が引き続き担当致します。何かありましたら石田または富樫先生までご連絡下さいませよう、よろしく願い致します。

さて、2006年度の運動生理学分野の活動は、今年も、…いや、ありました。外国人招聘セミナーです。昨年に引き続き、東海体育学会の援助を受けてセミナーを開催致しましたので、報告致します。

12月初旬に熊本県立大学・福岡義之先生、県立広

島大学・福場良之先生の招聘で(科研費・企画調査)、Dr. Jason H. Mateikaが来日され、熊本、広島で講演された後、12月11日午後5時から名古屋大学の総合保健体育科学センターで、東海体育学会の後援のもと、研究セミナーを開催致しました。Dr. Mateikaは呼吸生理学が専門で、90年代中頃まではカナダで運動時の換気亢進について精力的に研究を行い、90年代後半にアメリカに異動してからは呼吸の化学調節と睡眠時無呼吸症候群について研究を進めてこられました。現在はWayne State Universityの助教授をされています。今回のセミナーでは、"Impact of intermittent hypoxia on the ventilatory response to hypercapnia and hypoxia in health and disease"というタイトルで、間欠的低酸素暴露と化学感受性の話を中心に、性差や遺伝に関して興味深い話題を提供して頂きました。参加者は16名程度とこじんまりとしていましたが、専門領域が近い名古屋大学の片山先生の的確な翻訳・解説もあり、参加者には非常に理解しやすいセミナーだったと思います。また、質疑応答も(英語で)活発に行われ、非常に有意義なセミナーになりました。写真は終了後の記念写真ですが、セミナーおよび前後の接待の様子を「呼吸研究会」のホームページ(<http://www.htc.nagoya-u.ac.jp/~ishida/Mateika/photomain.html>)にて公開しておりますので、是非ご覧下さい。



出迎えや観光案内など、世話役はなかなか大変で、片山先生にはお世話になりました。しかし前後の接待を含めて外国人研究者を招待することは、海外との研究交流を深める良い機会でもあり、今後とも積極的に外国人招待セミナーを開催したいと思います。その節はご協力・ご参加よろしくお願い致します。今回、招聘が決定したのが遅く、十分なPRができませんでした。東海体育学会からは、少しばかりの援助と、宣伝の機会を与えて下さるので、もし、運動生理学分野の外国人研究者を

東海地方に招待して講演される場合は、お早めに石田までご連絡下さい。よろしくお願い致します。

運動生理学分野の方のメールアドレスの収集が芳しくなく、また、個人情報保護法などもあり、情報網の確立がなかなか難しくなっております。しかし情報の伝達にはメールが一番安価で迅速です。もしメールアドレスの登録がまだの方がいらっしゃいましたら、下記のアドレスまでご連絡頂ければ幸いです。

運動生理学分野世話人:石田浩司(ishida@htc.nagoya-u.ac.jp)

発育発達・測定評価分野の活動報告

報告者 藤井勝紀(愛知工業大学)

日本発育発達学会では、昨年度より学会の活性化に向けて、月に1度の研究会を開催することになり、月例会と称してスタートしました。しかし、地方の方の参加はなかなか難しいので、そのような点を考慮して地方で分担して開催する方向が打ち出されました。そこで、日本発育発達学会第2回大会を東海地方で行った経緯から、東海地方で最初に地方月例研究会を開催することになりました。この地方月例会は昨年の研究会をさらに発展させた内容になっています。以下にその要領を示します。

内容:日本発育発達学会第1回東海地方月例会

日時:2006年6月3日(土曜日)、午後2時~5時

場所:愛知工業大学本山キャンパス 1F多目的室

演題1:「発育発達と数学関数の接点」

演者:藤井勝紀(愛知工業大学)

演題2:「推定脂肪量の初経発来臨界期に関する検証」

演者:小栗和雄(静岡産業大学)

演題3:「小・中学サッカー少年団、大学生アメフト選手の大腿筋量・筋力の比較」

演者:館俊樹(静岡県総合保健センター)

特に、今回の内容は東海体育学会を見据えて発表してもらいました。

内容:日本発育発達学会第2回東海地方月例会

日時:平成18年10月28日(土曜日)午後5時~7時

場所:愛知工業大学本山キャンパス 1F多目的室

演題1:「中学生男子の体格の違いと体力指標との関連」

演者:朝内大輔(南山大学付属中学・高校男子部)

演題2:「幼児の身体組成および骨密度(SOS値)の加

齢変化と身体組成間の関係」

演者：境田雅章（愛知学院大学）

東海体育学会を控えて最終的な検討を行い、発表内容をさらに充実しました。

以上の地方月例会を踏まえて、平成19年3月17日（土曜日）、18日（日曜日）に日本発育発達学会が開催され、以上発表された先生方を初め、東海発育発達測定評

価分科会の先生方、石垣享先生（愛知県立芸術大学）、酒井俊郎先生（浜松学院大学）、斎藤由美先生（名古屋造形芸術大学）、田中望先生（中京女子大学）等が発表されました。特に、酒井俊郎先生は優秀発表に選ばれました。さらに、今年度も東海地方月例会を企画し、6月には開催予定です。

編集委員会活動報告

編集委員長 石田 浩 司

- 1.「東海保健体育科学（第28巻）」の総説執筆者として、体育科教育学が専門の出原泰明先生（名古屋大学）を編集委員会で選考し、理事会に推挙し承認を得た。
- 2.前編集委員会からの引継ぎ事項である、「ホームページを利用したオンライン投稿やE-mailの添付ファイルを利用した投稿・査読システム構築」については、事務処理の簡素化や郵送費節約などの観点から導入が期待されたが、投稿・審査用ホームページ作成など初期費用がかさむことや、学会名簿へのメールアドレス登録状況が悪いこと、セキュリティの問題があることなど課題が多く、編集委員会としては当分の間実施を見送ることとした。しかし受領はがきなどの電子メール化や、査読者からの論文本体の返送の省略などを通じて経費節約を図ることとした。
- 3.学会大会における講演内容を学会誌に掲載することについて、編集委員会及び理事会で検討した結果、基本としてテープ起ししたものを学会誌に掲載することとし、講演者への原稿依頼は講演依頼時に学会大会委員会から行い、編集委員会では文章化された講演内容について編集作業を進める業務を行うこととした。
- 4.東海体育学会大会開催時に、企画委員3名と編集委員5名からなる「東海体育学会学術奨励賞」選考委員会を開催し、平成18年度東海体育学会学術奨励賞の受賞候補者2名を選考し、理事会に推薦し承認された。
- 5.「東海保健体育科学」投稿規定の第1条「本誌に投稿できる者は東海体育学会会員に限る。」という条文で、「投稿できる者」に共同研究者が含まれるか否か曖昧であり、また論文投稿の推進のため、この条文の改定を編集委員会及び理事会で審議した。その結果、第1条を「本誌に投稿（第1著者：ファースト・オーサー）できるのは、東海体育学会会員に限る。共同研究者には本学会員以外の者を加えることができるが、その場合、当該論文が受理された時点で、本学会員以外1名につき3,000円を学会事務局に納付する。」に改定することとし、理事会及び総会において承認され、平成18年11月26日より施行された。このことにより、共同研究者全員が必ずしも東海体育学会員である必要がなくなり、論文投稿が容易になった。
- 6.「東海保健体育科学（第28巻）」を平成18年12月25日に発行した。掲載内容は総説1編、原著論文4編（うち1編は学術奨励賞論文）及び資料2編の計7編であった。
- 7.他の雑誌等の著作物からの図表の利用の際に無断使用が問題になるなど、「著作権」について最近重要性が高まっている。そこで他学会や出版社等から情報を集め、今後問題点・解決策を検討していくこととした。

広報委員会活動報告

広報委員長 來田 享子

2006年度の広報委員会では、以下の2項目について活動を行った。

ホームページの更新作業効率化をめざし、ブログ形式へと移行させることを決定し、その準備を進めた。これに伴い、2007年度以降は、①東海体育学会としてレンタル・サーバーを契約する、②独自ドメインの取得、③ブログシステム構築の業者委託を実施することになる。

2007年7月頃にはホームページのデザインを一新し、独自ドメインの新規URLを会員にお知らせすることが可能になる見通しである。

東海体育学会会報第79号を2006年6月に刊行した。刊行にあたり、原稿執筆の労をおとりいただいた会員等関係者各位、印刷費の援助をいただいた株式会社ミニミ様に、感謝いたします。

大会実行委員会活動報告

学会大会委員長 小林 培男

学会大会委員会は、東海体育学会の中心的で最大の研究事業である第54回学会大会を企画し、運営してまいりました。特にこの第54回大会は岐阜聖徳学園大学に所属される会員を中心にその地域に所属される会員が加わった、広域地域による実行委員会が組織された新しい形での学会大会の企画と運営でありました。これが改革の第一で、会員の学会活動の負担バランスが改善され、新たな研究交流の機会にもなったものと思われれます。

減少する参加者と発表演題数を何としてでも食い止めようと学会大会委員会とこの実行委員会が連携してまいりました。改革の第二は、研究抄録の簡素化や申し込み時の電子機器による簡素化によって、より小回りの効く受付業務や大会号編集業務ができました。

学会大会委員会と大会実行委員会のこのようなアイデアと積極的な改革企画で、発表演題数24演題、会員参加者数120名、一般参加者数150名と近年にない盛り上がった学会大会となりました。

学会大会委員会では今年度も「会員と市民に開かれた学会大会」を目指し、学会大会活性化のための改革が必要であると認識し、学会大会の開催のあり方や成果の刊行など大きな課題に向かって一つ一つ進めています。

今後も多くの会員と市民の皆様の参加をいただいて、研究交流を一層発展させたいと願っています。学会大会へのご参加と学会大会委員会へのご意見やご要望をお待ちいたしています。

連絡先:masuok0730@hotmail.com

東海体育学会第55回大会のご案内

第55回大会長挨拶

東海体育学会第55回大会会長 星 川 保（東海学園大学）

平成16年4月に開設された本学、人間健康学部は、今年、完成年度を迎え、明春3月には最初の卒業生を社会に送り出します。このような節目の時期に学部教育に関係した学術の会を開催できる栄誉を賜りましたことを心から御礼申し上げます。同時に、会員の皆さまの多数の御参加をお待ち致しています。

年次学会大会の主要な目的は文字どおり学術について新たな知見を公表し、学会員相互の意見交換です。当番校と致しましては発表会場の設定に困惑するほど数多い新知見の発表を期待しています。

次いで学会大会の恒例的行事としては特別講演やシンポジウムがあります。これらの行事をどのように企画するかによって年次大会の特色や性格が決まります。

私どもは理事会の承認を得て、中心課題を「体育・スポーツの専門知、スキルの育成と活用法」、平たく言い換えると、スポーツ・体育の分野で職業として活用できる専門知やスキルをどのように育み、社会に活用していくかということです。例えば、医師は電話相談を受けただけで診察報酬を受けることができます。また、歩数計を使って運動処方をして医師ならば診療報酬が得られるのに対し、同じことをしてもスポーツ・体育関係者の場合には無償のサービスに終わります。すなわち、医師の専門性には知的財産として貨幣に置き換えられる価値のあることを社会が認めているといえます。

かつて、わが国には体育・スポーツ指導者育成の高等教育機関は東京教育大、広島大、日本体育大など五指に満たないものでした。したがって、その卒業生の大多数は教職に就くことによって社会的地位の確保と同時に生計を立てることが可能でした。然るに、平成16年5月現在、体育・スポーツ系の大学は全国に国立大学：27校、私立大学：25校、短期大学：8校（スポーツ経営学科をもつ大学を除く）で、それらの入学定員総計は：7977名に達します*。これに体育・スポーツ系の専門学校を加えるとその卒業生数は莫大なものに達するものと予測されます。今後、健康志向の進む社会状況下においてこの数は増加することはあっても減少することはないと考えられます。

さて、これらの教育機関でスポーツ・体育を専門として学んだ卒業生に予定されている働き場所はとなると、相変わらず、数校の高等教育機関しか存在しなかった頃と変わらず、教職以外特に拡大しているとは思えません。ちなみに私どもが来春はじめて社会に送り出す1期生の就職先を考えた時に、健康だ・スポーツだという社会のかけ声とは裏腹に、スポーツ・体育を専攻した学生の専門性を生かした就職先の余りにも少ないことに驚きました。「文学部を卒業しても作家になれないのと同様に、スポーツ・体育を専攻してもスポーツ・体育で飯が食えなくてもかまわない」という意見も当然あるとは思いますが、専攻学生にスポーツ・体育の分野で貨幣価値に、置き換えられる専門知・スキルをどのように学ばせ、育み、さらには、体得した知、スキルに社会的承認を取り付ける方策を考えることは、何ごとにも先達はといわれるように今日、幸いにしてスポーツ・体育を飯の種としているわれわれの課題だと自覚し、特別講演、シンポジウムを企画しました。スポーツ・体育を学ぶ多くの学徒諸君の参加を特に期待しています。（*コーチングクリニック 2004（No.5））

学会大会要項

【日時】

2007年10月20日（土）

【会場】

東海学園大学三好キャンパス

(<http://www.tokaigakuen-u.ac.jp/access2.html>)

【内容】

研究発表 理事会 総会（役員選挙）

特別講演 宮下充正先生（東京大学名誉教授）

シンポジウム：「スポーツ・体育における専門知、スキル育成と活用法」

【参加資格】

参加者は、東海体育学会会員および正会員以外の当日会員です。

【参加費】

平成19年度会費を納入した東海体育学会会員は無料、特別共同研究者と当日会員は1,000円です。

【研究発表】

1) 発表資格

発表者・共同研究者は、東海体育学会会員であり、平成19年度会費を納入済みであることとする。

但し、本学会会員以外の特別共同研究者を加える場合は、東海体育学会事務局へ事前に連絡の上、必要な手続きをして下さい。

2) 発表の申込み

研究発表を希望される方は、東海体育学会のホームページ(<http://wwwsoc.nii.ac.jp/tspe/>)から、発表申込書をダウンロードしてご利用下さい。または、事前にEメールにて、発表申込書を大会事務局へご請求下さい。添付ファイルにて送付します。

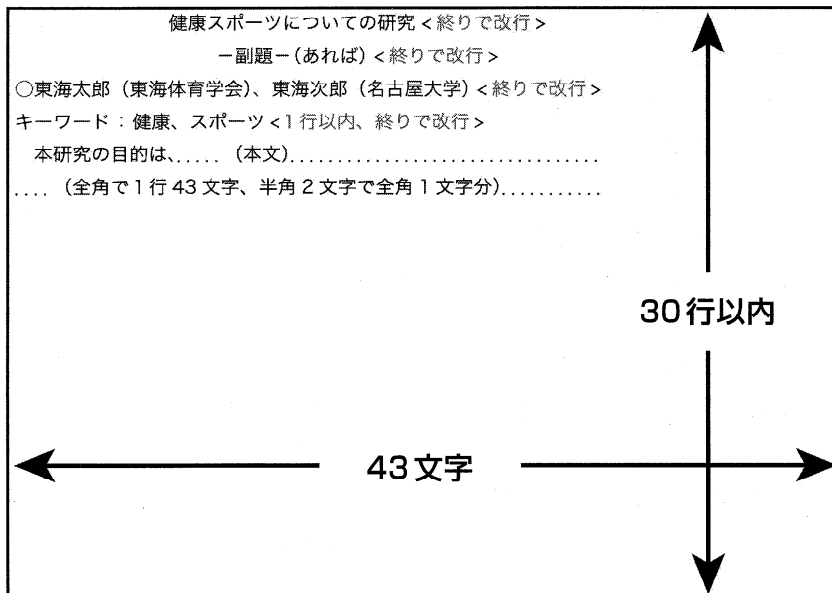
発表申込書を抄録原稿とともに、Eメールにて送付し、申込み下さい。

3) 抄録原稿

抄録には、演題[必要であれば副題]、発表者(演者に○)と(所属)、およびキーワード(1行以内)を、記入例を参考にして記載して下さい。

演題、発表者、キーワード、本文等、全てを含め、全体が全角43文字×30行(1,290文字)に収まるように原稿を作成して下さい。超過分は印刷できなくなります。半角2文字で全角1文字分とします。図表の挿入はできません。

記入例



抄録原稿は、大会事務局へEメールの添付ファイル(ワード、又はテキスト形式)にて送付下さい。

4) 締切り日

平成19年8月15日(水)必着

5) 発表方法と時間

口頭発表(発表15分と質疑応答5分の計20分間)

6) 発表形式

パソコン(パワーポイント)、OHP、VTR、資料のいずれかの方法とします。資料は100部用意して下さい。パソコンでの発表はUSBメモリをご利用下さい。

【その他】

東海体育学会学術奨励賞は、本大会において発表された研究の中から選考します。

【大会事務局】

〒470-0207 愛知県西加茂郡三好町福谷西ノ洞21-233

東海学園大学経営学部 森 悟 研究室

東海体育学会第55回大会事務局

Tel&Fax:0561-36-9032

メールアドレス:mori@tokaigakuen-u.ac.jp

【講演会開催】

2007年度 東海体育学会講演会のご案内

東海体育学会企画委員会

本講演会は、昨年提案された講演会、東海体育学研究セミナーのテーマとして、「体育学・スポーツ科学のトピックを考える」を継承し、そのサブテーマとして、「体育学・スポーツ科学の将来的展望-その活性化に向けて-」を掲げることにした。体育学・スポーツ科学の発展に向けて、学会の存在意義は非常に重要な役割を担う。今、俄に日本体育学会の沈滞化が言われているが、再度、我々の足下である体育学会の意義を見つめ直す必要があると考え、その学会を含めた体育学・スポーツ科学の将来的な展望について理解を深めるために本講演会を提案する。

記

1.講演主テーマ

「体育学・スポーツ科学の将来的展望-その活性化に向けて-」

2.講 師

小林 寛道 先生(東京大学名誉教授 日本体育学会会長)

3.日 時

平成19年6月23日 土曜日

午後3時～5時00分

4.会 場

愛知工業大学(本山キャンパス 3F大講義室 304号室)

〒464-0807 名古屋市千種区東山通1-38-1

Tel:052-789-1381

<交通アクセス>

<http://www.aitech.ac.jp/access/motoyama.html>をご参照ください。

〔注〕駐車場がありませんので、公共交通機関をご利用ください。

尚、5時30分から親睦会を企画します。(場所は同キャンパス内多目的室)

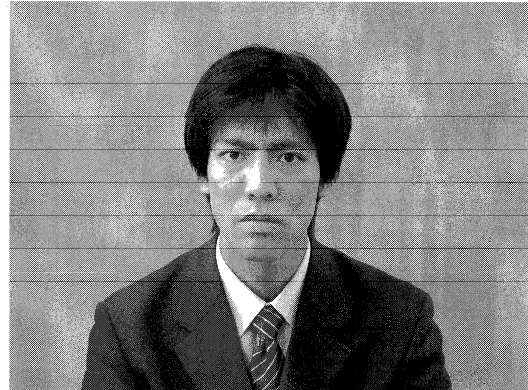
学術奨励賞を受賞して

中 村 和 誉

私が骨格筋の働きについて勉強を始めたのは大学3年の時からです。元々、私は子どもの頃から身体が弱かったこともあり、どうして同じヒトでも運動能力が違うかなど、人の身体の仕組みというものに以前から興味を持っていました。そんな理由から愛知教育大学、スポーツ・健康コースに進学し、骨格筋の適応変化を研究している鈴木ゼミを選んだことが、この研究に携わるようになった切掛けです。

当時の研究室では、先輩方もラットの骨格筋を用いて、筋内の異なる部位の筋線維の適応変化に関する研究を行っていました。その当時の研究は単に骨格筋を膝関節に近い近位部と足関節に近い遠位部に分け、その部位における筋線維の組織化学的特性を比較しているものでした。一方で、内側腓腹筋(MG)に関しては主要な2本の神経枝が筋に入り込み、この神経に支配される部位の筋線維群の機能(収縮特性)が異なることが報告されていました。機能が異なるということは当然適応変化も異なることが予想されました。そこで、私はMGの異なる神経由来の部位を同定した後に、これらの異なる筋内部位の筋線維の適応変化を調べることにしました。

まず始めに筋内の部位を特定するため、MGに入り込む2本の神経枝の一方を電気刺激して筋線維グリコーゲンを枯渇させることを行いました。当初、比較的簡単にできようと考えていましたが、不器用な私には筋に入り込む支配神経の特定や、神経を介しての電気刺激といった作業は大変難しく苦労させられました。しかし試行錯誤の結果、異なる縦断的部位から作成したいずれの横断切片においても、グリコーゲンが枯渇した部位と残っている部位を明確に分けることができた時は感激しました。そして、特定できた部位を参考に、持久性



走トレーニングや脱トレーニングに対する異なる筋内部位での筋線維の適応変化を観察することができました。これらの結果、一つの骨格筋においても筋線維の適応変化は部位によって異なることが証明できました。一様に収縮し、決まったある動作のために働いているように見える骨格筋ですが、実は様々な動きに対応できるような機能を有していることが示唆されました。今後多様な条件下での実験を行う必要があると考えられますが、それらのデータの蓄積がより効率的なトレーニングやリハビリテーションのための基礎資料となれば良いと考えております。

今思えば、家でもペットの世話もしたことなかった私が、ラットの世話に始まり、トレーニングを行うなど、休み返上でラット中心の生活を過ごしたことは良い思い出です。また研究を進める中で、多くの先生や先輩に支えられて結果を出せたことは貴重な経験となりました。また、こうして地道に行ってきた研究が学会で認められたことは大変な名誉であります。改めて、お世話になった先生や先輩方、発表の機会を与えて下さった当学会に感謝申し上げます。

体験的オーストラリア・ジュニアスポーツ事情

桜井 伸 二 (中京大学体育学部)

2006年度の1年間、西オーストラリア州パースのUniversity of Western Australiaに研究員として滞在する機会を得た。滞在中はテニスのサーブ動作に関するバイオメカニクス研究に従事した。オーストラリアは「スポーツ大国」と国の内外から考えられている。確かに、大学における専門分野を尋ねられ「Human Movement(体育学あるいはスポーツ科学に相当する)です」と答えたときの、「それは面白い、大切な分野だ」という相手の反応が、なんとも心地良かった。しかしながら、相変わらず英語では苦勞の連続であった。挨拶や買い物はともかくとして、仕事の面では、読み、書き、聞き、話すという全ての語学力の絶対的な不足を痛感させられる毎日だった。それでも、同じ地に以前にも滞在していたことがあるため、土地勘もあり、知人も多く、少し余裕を持ってオーストラリア人の生活ぶりや考え方を見ることができたような気もする。

滞在中には、スポーツ界で日豪両国に関係するできごとがいくつかあった。6月のサッカー・ワールドカップの前後には、日本とオーストラリアが対戦して気まずかっただろうと、メールで心配してくれた友人もいた。サッカーは子どものスポーツとしては西オーストラリア州においても人気スポーツの一つである。しかし、観るスポーツとしてはオーストラリアンフットボールが一番人気でサッカーやユニオン・ラグビーはそれほど注目されていない。そのせいか、あるいは3-1でオーストラリアが逆転勝利を収めたせいもあってか、日本とオーストラリアが戦うことで肩身が狭いなどということはほとんど感じなかった。また11月のメルボルンカップ(競馬)というオーストラリア最大のスポーツイベントでは、岩田康誠騎手が騎乗したデルタブルースが1位に、さらに2位にも日本馬のポップロックが入った。今度は私は一転して鼻高々だったのだが、移民が4分の1以上を占め、ことさら国の内外の区別に敏感でないせいか、別に私自身が賞賛されたり、あるいは祝福されたりしたわけでもなかった。

日本と同様に、週末の午後のテレビではスポーツ番組が大きな枠を占めている。野球とゴルフが幅を利かせる日本に比べて、プロスポーツとしてのオーストラリアンフッ

トボールやリーグ・ラグビーはもとより、サーフライフセービングやヨット、ローンボウリングやビリヤードなど、かなり多様なスポーツ種目が放送されていた。NHKに相当する公共放送がツールドフランスを毎日のように中継していたが、野球の放送は一度も目にする事がなかった。子どもたちが実施するスポーツとしては、サッカーや水泳を除くと、ネットボールやクリケット、オーストラリアンフットボールなど日本ではあまりなじみのない種目の人気がとても高かった。

さて、私の出発から遅れること1ヶ月、家内と高校2年生の娘も5月に合流し、11ヶ月間をともに過ごした。最初は娘が通う学校がなかなか決まらず苦勞したが、結局カトリックの私立の共学校が受け入れてくれた。大学にもいろいろと日本と違う点が多いが、高校にも日豪でさまざまな相違があり親子ともども戸惑うことが多かった。「クラス」という概念がほとんどなく、生徒によって時間割がかなり異なるため、一緒に受講する生徒が科目ごとに皆違うのだという。ある意味では日本の大学の授業体制に似ているといえるかもしれない。親と一緒にいてさえこんなにもわからないことが多く困り果ててしまうのに、親元を離れ一人で留学する子というのはなんと強靱な精神力を持っているのだろうと思った。

実は日本の高校を離れてオーストラリアに同行することに娘は初め全く乗り気ではなかった。高校入学と同時にテニス部に入ってテニスを始め、プレーすることが面白くてたまらない時期で、しかも多くの良い友だちにも恵まれていたためだと思う。同行するよう説得するための一つの材料として、オーストラリアはテニス王国として有名で思う存分テニスができること娘には言い聞かせていた。しかし到着してみると全くあてが外れた。まず、少数の例外を除いてほとんどのスポーツは学校をベースに行なわれているわけではなく、通う学校にはテニス部というのがそもそもなかった。アパートから2kmほどのテニスクラブに入会したが、いつ行ってもほとんど人がいない。特に同じような年代の子は皆無だった。

あとからわかったことだが、かなり強い子は選抜され西オーストラリア州のステートテニスセンターでほぼ毎日

練習をしている。私の実験の被験者になってくれたブライデン・エブデン選手もそのうちの一人で、1月の全豪オープンテニスのジュニア選手権で優勝した。そのようにほぼ専門的にプレーしている場合や、あるいは逆にテニスを始めたばかりでレッスンを受けている小学生は別として、多くの子は1年間のうち夏の間の半年間しかプレーしないとのことだった。つまりテニスは10月から3月の夏のスポーツなのだという。

日本にいたときに娘が在学していた高校のテニス部の施設はお世辞にもほめられたものではなく、60名ほどの部員に対して水はけの悪い土のコートが2面あるだけだった。朝6時に起き、6時半に家を出て、朝練習を1時間ほど、さらに放課後や週末にも長時間の練習をしていた。まさにテニス漬けの毎日だった。それに対してオーストラリアで入会したテニスクラブには芝18面、ハード10面の計28コートがあったが、シーズンオフである冬の間には芝のコートのネットや支柱もはずされ、28コートに誰もいないことが続いた。仕方なく私や家内が娘とのラリーの相手をした。日本では2コートに60人、オーストラリアでは28コートに2人だけで、その落差がなんだか滑稽にさえ感じられた。

英語の壁も想像以上に高く、スポーツを共通に楽しむ機会もなく、親しい友人ができそうもなく娘は学校に行きたくなさそうにしていた。そうこうしているうちに、テニスのためのトレーニングになりそうだからということで、高校のローイング(漕艇、ボート)のクラブに入ると娘は言い出した。このクラブは通学する高校で活発に行われている唯一のクラブであった。詳しい理由は分からないが、男子のボートは夏の、そして女子のボートは冬のスポーツだという。日本ではボートなど漕いだ経験は全くなかった。



最初の1日だけはローイングエルゴメータで練習したようだが、2日目からはもう実際に水に出て4人乗りのスカル艇で船首に近いバウの位置で漕いでいるのを見て驚いた。どう見ても身体は一番小さくコックスよりさらに小柄であったが、コックスではなく漕ぎたいと言うと、コーチは希

望を聞いてくれたのだという。5月から8月の間に5回行なわれたレースにも4人乗りスカルで毎回必ず出場させてもらうことができた。乗り慣れないシングルスカルの練習中には転覆も経験したという。

ローイングでは朝5時半からの練習のために週2回、そして朝7時からの練習および試合のために週1~2回、アパートから15km離れた艇庫まで親が車で連れて行かなければならない。6月や7月の夜明けは日本の冬と同じく朝7時頃なので、6時半頃までは真っ暗で寒い。そしてもちろん眠い。

練習だけではない。試合の日の前夜には同じ学年の15人ほどがメンバーの中の誰かの家に集まり持ち寄り夕食をとる。炭水化物ローディングを意識してか、「バスタナイト」と呼ぶ。お気に入りのパジャマで、スポーツウェアで、あるいはディズニー映画の主人公の格好で、などと毎回テーマが決められ、その準備もけっこう大変だった。それに加え、ボート購入にあてる資金集めのためクイズナイトという催しの開催、さらに試合当日には手作りのケーキやホットドックを売って計100万円の利益をあげた。子ども以上に親もがんばらなければならなかった。しかしこのローイング・クラブのチームメイトにはじまり、それ以降はどんどん学校で友達が増えていくことになった。

友達になった子どもたちを見ていると、たいていの子は2~4種類ほどのスポーツや習い事をしていて、ボート以外のスポーツ、バイオリンやチェロなどの音楽、ドラマ(演劇)やバレエなど多様だ。日本における塾通いとはまた別の意味で子どもたちはけっこう忙しい毎日を送っていた。そして多くの家庭では両親がそれに関わって当然だという意識があるようだ。家内も毎日の子どもの送り迎えをはじめとしてこのような催しへの協力や親同士の付き合いで忙しく駆け回っている感じだった。

さて、女子のボートのシーズンが終わる8月頃には、テニスクラブに夏のリーグ戦の申し込み用紙が置かれるようになった。男女のオープン(成人)の部には土曜日午後、日曜日午前、水曜日夜間などのリーグがあり、また35歳以上、55歳以上というシニアの部もあった。ジュニアのテニスリーグは12歳以下、14歳以下、16歳以下、18歳以下と男女それぞれ4つのリーグに分かれており、全て日曜日午前中に行なわれるとのことだった。

パース近郊には約50のテニスクラブがある。各テニスクラブではリーグ戦参加希望のメンバーを適当に組み合わせ、最少4名、最多で8名(たいてい5~6名)のチームを作り西オーストラリア州テニス協会(Tennis West)に申し込む。一つのテニスクラブから複数チームを同じ

リーグにエントリーすることも可能だ。協会では申し込みのあったチームを6~8チーム組み合わせでディビジョンリーグを作る。この際にチーム構成メンバーのITNポイント(International Tennis Number:国際テニス連盟による技術レベル評価)の合計によってレベル分けされる。最もチーム数が多かった土曜日成人男子オープンの場合には、ほとんどプロレベルのステートディビジョンを頂点に第17ディビジョンまで各8チームで構成されていた。

娘は18歳以下女子のリーグに申し込んだ。18歳以下はジュニアのリーグに出なければならぬものと思ったのだが、その年代では成人女子オープンの部に出る方が普通のように、18歳以下女子の部は各6チームでディビジョン2までしかなかった。体力的・技術的に可能でより適切だと思えば12歳の子が16歳以下の部にエントリーしたりすることも普通に行われていた。



メンバーの中から毎回4名が出場し、各チームは同じディビジョン内の他のチームとホーム&アウェイで2度ずつ試合する。シニアおよび女性、そして男女ミックスなどのダブルスだけのリーグを除いて、シングルス4試合、ダブルス2試合を行なう。つまり4人のメンバー全てが1日のうちにシングルスとダブルスを両方連続してプレーしなければならない。シングルス、ダブルスとも3セットマッチで、体力的にかなり厳しい。6試合の勝ち負けで勝敗が決まる。勝ち数が3対3で同じならセット数で、セット数が同じならゲーム数でチームとしての勝ち負けが決まる。1ゲームたりと疎かにはできない。各リーグの上位4チームがファイナルに出場しトーナメントで優勝盾を争う。

夏の甲子園高校野球に代表されるように、日本では中学校や高校の試合はほとんどの競技でトーナメント形式によって行なわれる。トーナメント形式とは、参加者の半分が最初の試合で負け、その1回限りの負けでその大会は終わることを意味する。弱い者は試合の経験がつかず、いつまでも弱いままに続く。対照的に、オーストラリアで目にしたほとんど全ての試合は種目を問わずリーグ戦形式だった。8チームがホーム&アウェイで戦う

テニスリーグの場合には、どんなに弱くてもチームとして14試合、各個人も10回程度は試合の経験が必ず積めることになる。

勝ち負けには非常に強くこだわる。勝利に対する執着は大人も子どもも関係なくずいぶん強い。勝負にこだわるあまりか、試合態度のよろしくない人が年齢を問わずたまに見られた。しかしごく少数の例外を除き、セルフジャッジの判定などは総じてフェアだと感じた。勝ち負けにはこだわるが、試合に出場するメンバーの選び方は公平が旨のようだ。強い者が、すなわちポイントが上位の者が多く出場したほうが勝利の可能性は高いわけだが、特別なことがない限り参加メンバーが同じ回数ずつ出場できるようどのチームも配慮しているようだった。

娘が小学生の頃、子ども会のソフトボールに参加した経験があるが、その時はまったく違っていた。2ヶ月間ほど毎週末練習し、チームは夏休みの大会に参加した。相手チームはなかなか強く、3回くらいで既に点差は開き、勝ちには到底望めそうもなかった。それでも1点でも多く取ろうと努力するのがスポーツマンシップだというのか、監督は最終回までメンバーを一人も代えることなく、9人で戦い続けた。娘を含み7~8人のベンチウォーマーに声がかかることは最後までなかった。試合はトーナメントで、この1試合でその年のソフトボールは終わった。その後娘がソフトボールをすることは2度となかった。

トーナメントではなくリーグ戦という形式、そして出場するメンバーの選び方を見ていて、オーストラリアにあっては、スポーツ参加における機会の平等という考え方が重視されているのだと思った。例外はもちろんある。ジュニアのテニスの場合には、リーグ戦におけるメンバー選任方法の決まりは特にないが、ファイナルトーナメントに出場した場合にはチーム内のポイント上位3名は無条件に出場権があり、残りの1名枠については6位と5位の勝者が4位と試合して勝った者が出場権を得ることになっていた。またボートの場合には、初心者の子はいつでも1レースだけの出場だったが、経験があり一番強い子はシングルスカル、クワドスカル、エイトと1日のうちに3レースに出場していた。

11ヶ月間の滞在の間、娘は異国の地で冬はボート、夏はテニスを経験することができた。その他に友達とチームを組んで水曜日午後にネットボール(バスケットボールに似た英連邦諸国独特の女子のスポーツ)のリーグ戦にも参加した。ほとんど練習もせずただ試合開始の10分前に集まるだけのチームなので、成績はもちろん振るわないのだが、全員が実に楽しそうに頬を真っ赤にして



走り回っていた。学校が主催する早朝サーフィン教室にも参加した。学校の帰りにフィットネスクラブに立ち寄ることもあった。日本にいたら試みなかったであろうスポーツを経験でき、あるいは同じスポーツであっても全く違った形で経験でき、スポーツ参加という面からは娘にとって有意義な滞在だったと思う。またそうしたスポーツのさまざまな側面を見ることができて、私にとっても貴重な経験になった。

日本では少子化に伴い、地域や学校、そしてスポーツ

種目によっては、学校のクラブ活動が存続していくことが危うくなってきていると聞く。もちろん学校のクラブ活動がとても重要な意味を持っているのはわかる。自分自身の学校生活を振り返ると、他のことはほとんど覚えていなくてもクラブ活動における出来事やその時々チームメイトの表情だけは鮮明に思い出せる。しかしもし学校のクラブ活動がなくなったとしたらどうだろう。かえっていろいろな選択肢が増え、もっと多様なスポーツに親しむ環境ができる可能性が生まれるのではないかと思った。

「テニス王国」とはいうものの、ヒューイット以外には男女のテニス界で今のところ目立った成績をあげる選手はオーストラリアにいない。しかし「スポーツ大国」であることは確かだと思う。それは必ずしもオリンピックにおけるメダルの数によるのではなく、いかに国民がスポーツを好きであるかにかかっている。学校のクラブ活動をはじめとして現在の日本のスポーツを取り巻く環境や制度は、全てがスポーツを好きにする人間づくりに本当に役立っているのか、自信を持ってイエスと言えないような気がした。

研究室訪問I

コメディカルとして医療に携わる学生への教育と研究活動

加藤 尊 (鈴鹿医療科学大学)

本学の名を初めて目にする方もいらっしゃるでしょう。鈴鹿山麓を背に、伊勢湾から程近い鈴鹿の地に、鈴鹿医療科学大学が設立されて17年目を迎えています。日本放射線技師会を中心に4年制大学として設立された「保健衛生学部」放射線技術学科、医療栄養学科、理学療法学科、医療福祉学科、「医用工学部」臨床工学科、医用情報学科、「鍼灸学部」鍼灸学科、来年度開学が予定される「薬学部」薬学科を含めると、4学部8学科を擁する医療福祉系総合大学となります。大学院は保健衛生学研究科、医療情報学専攻に修士課程並びに博士課程、医療栄養学専攻に修士課程が設置されています。全学科で国家資格や学会資格取得という明瞭な目的を持ち、卒業生はコメディカルとして現代のチーム医療に欠くことの出来ない役割を担っております。

本学の体育

現在、スポーツ健康科学とスポーツ科学実習を全学科で、卒業研究ゼミナール、運動生理学を所属する医療栄養学科にて担当しております。講義を必修とする

学科は2学科、実習を必修とする学科が4学科、選択としている学科では平均して7割から8割の学生が受講しております。体育関連施設は、体育館、テニスコート2面と多目的グラウンドです。余談ですが2-3年前、台風通過後にワカメで覆われたグラウンドを見た時には我が目を疑いました。今もグラウンドの片隅に残骸が残っております。さて、国の施策が一次予防へ注力されている現状から、学内でも体育に対して概ね好意的であると感じております。また、新学科増設や改組などに伴い停滞していた教養部会など組織的な活動も息を吹き返し、教養教育の重要性が再認識され始めているのではないかと思います。

スポーツ鍼灸、競技選手のリハビリやトレーニングに特化した理学療法士、競技選手を食事面よりサポートする管理栄養士などを夢見て入学してくる学生もおります。漠然としながらも、それぞれの道でスポーツに携わりたいとの思いを持った学生が、我々の研究室を訪れアドバイスを求めることも少なくありません。しかし、その道が厳しく狭き門であること＝“現実の就職先として”、を实

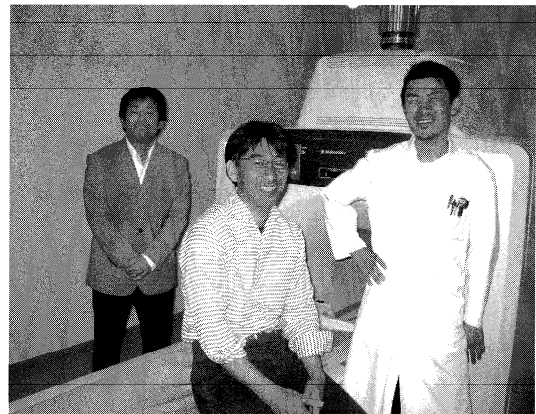
感させるのにそう時間はかかりません。私が所属する医療栄養学科では、医療や福祉、また食品関係への就職が大多数です。しかし、ここ4年間続けてスポーツクラブに就職した者も出ており、現在も複数名の4年生がスポーツクラブへの就職活動中です。他のスポーツクラブとの違いを打ち出し、食に力を入れるスポーツクラブが出てきたこともあるのでしょう。

他学科との共同研究

7年前、本学赴任の際、現中京大学学長 北川 薫先生より、“外に出るな!まず学内で地道に教育、研究に励むことが重要だ”とのアドバイスを頂きました。しかしこの言葉とは裏腹に、赴任直後に学科の実験室を覗いても、私がこれまで行ってきた研究活動に供する施設や設備は見当たりません。そこで力を入れたことは他学科との連携です。臨床工学科との指先動脈加速度脈波の共同研究や、本学健康管理センターに設置されているDXA装置、MRI装置を放射線技術学科との共同研究で測定協力頂いております。等速性筋力測定(Biodex)、フォースプレート(AMTI)を用いた床反力測定も理学療法学科との共同研究で実現しました。

本学で出来る研究を中心に、中京大学 梅村義久先生にご指導頂き“ジャンプトレーニングと骨強度”、所属

学科の特徴である“運動と栄養”、“水中運動と健康の維持増進”を3本柱とした研究活動を続けております。水中運動に関しては本学にプール施設は無いため、三重県営鈴鹿スポーツガーデン(<http://www.garden.suzuka.mie.jp/>)との相互協力関係を構築してきました。当然のことですが自前の施設、測定機器を持たないことの厳しさ、難しさを常々大いに感じています。しかし、教育面にも言えることですが、多方面からの理解と協力があって実現することが殆どであり、今後も地道に教育、研究活動を行なっていく所存です。



MRI装置を前に、放射線技術学科の山下先生(右)と筆者(中央)。

研究室訪問Ⅱ

新天地岐阜大学において

春日 晃 章 (岐阜大学教育学部)

非常勤時代を含め13年間勤めた岐阜聖徳学園大学短期大学部を3月に退職し、この4月より岐阜大学教育学部保健体育講座の一員として赴任することになった。これまでは、一般教育に属し、主にスポーツ演習やスポーツ健康学を担当していたため、講義の趣旨としては「みんなで楽しく取り組めるスポーツ」(スポーツ演習)、「分かりやすい一般的な健康学」(スポーツ健康学)であった。つまり、そこには自分自身が進めている研究の成果や専門的知見を伝える場は、多くはなかった。しかし、新天地の岐阜大学教育学部保健体育講座では1学年15名程度の学生および数名の大学院生がいる。もちろん彼らのほとんどは将来、保健体育の教員を目指して専門的な知識や指導法を習得すると共に、実際の教育の場へ赴き、実践的な経験を積んでいる。従って、これまでで以

上に私自身の研究領域に関する教授が可能であり、新たな環境で不慣れな点も多々あるが、楽しく、やり甲斐に感ずることも多い。

赴任して早速、週に1回のゼミ活動(午後8時~9時30分まで)を始動した。春日研究室の船出である。このゼミは、所属学生が順番に自分の興味のあることについて調べた結果をレポートにまとめ、発表し、皆でディスカッションする場である。最初は水泳部関係4名の参加で始まったが、現在では9名のゼミ生達(院生2名、4年生4名、1?3年生各1名)と共に活動している。最近では、院生や4年生のゼミ生は修士論文や卒業論文に関する先行研究も見据えた上で、発表テーマを決めている。

さて、私自身の研究活動であるが、大学時代より子どもから高齢者までの体力・運動能力および健康に関して

測定評価・発育発達の観点から研究を進め、近年は様々な測定方法の開発や評価方法の確立と普及を重点に置いてきた。幸いにも新天地の岐阜大学は私の家からは5分以内の通勤圏であり、所属大学は変わったが、これまで積み上げてきた私自身の研究土壌はそのまま引き継ぐことができた。現在は、主として以下の研究テーマに関して取り組んでいる。

- ① 幼児の体力向上に関する研究（体力評価基準の作成、評価システムの構築、ソフト開発etc.）
- ② モータースポーツ選手の身体能力に関する研究（F1レーサー養成のために）
- ③ 市民参加型体力診断システムに関する研究（多治見市との共同運営）

幼児に関しては私自身が幼稚園の経営者でもあるため、非常に興味が深く、ライフワークとして取り組むべき

研究である。現在は、現場で利用できる評価票も作成した（図参照）。レーサーに関する研究は私の趣味と仕事がかうまく融合した研究であり、近い将来そのスクールからF1レーサーを排出することを願ってフィジカル面のアドバイスをを行っている。市民参加型の診断システムに関しては、新体力テストほど、労力を掛けず、ゲーム感覚で子どもから高齢者までチャレンジでき、縦断的な診断ができるシステムの構築とソフト開発を目指している。

少子化の中、全国的に大学経営難の時代を迎えていることは明らかであり、我々教員に科せられた役割は多種多様ではあるが、わが国における教育の重要性を理解し、その大切な役割を实践する教員を養成することへの責任感を忘れることなく、いつ何時も教育とそれに関わる研究に対する情熱を持ち続けながら、ここ岐阜大学教育学部において邁進したいと思う。

特集：フィギュアスケートの科学と施設

フィギュアスケートジャンプのバイオメカニクス

池上久子（南山大学）

1. はじめに

フィギュアスケートは、シングル、ペア、アイスダンス、シンクロナイズドの競技があり、美しさと力強さを備えて多くの人を魅了するスポーツである。この中でも近年、シングル競技では世界の舞台で日本人選手が活躍し喝采を浴びている。2006年トリノオリンピックで、低迷した日本人選手団の中で最後に荒川静香選手が唯一の金メダルを獲得し、日本中が歓喜に沸いたことは記憶に残る出来事であった。また、2007年3月に東京で行われた世界選手権大会では、男子は2位、7位、女子は1位、2位、5位となり3名の日本人選手が表彰台に上がることができた。世界選手権優勝を成し遂げた安藤美姫選手は1989年の伊藤みどり、1994年の佐藤有香、2004年の荒川静香選手に続く史上4人目となり、2年連続で日本勢が世界の頂点に立ったことになる。また、2位となった浅田真央選手は、女子では1990年の伊藤みどり選手以来となるトリプルアクセル（3回転半ジャンプ）を成功させ、ショートプログラム5位からのぼん回でメダル獲得となった。日本ではシングルスケーティングの競技人口が最も多く、世界の舞台においても活躍している。ここではシングルスケーティングのバイオメカニクスについてジャンプ動作に関する分析から高難度のジャンプを成功させるための要因について考えてみたい。

2. スポーツバイオメカニクス

スポーツバイオメカニクスは、身体の運動に関して生体の構造や機能を力学的観点から解明する科学で、簡単にいえば、運動の仕組みを明らかにすることである。運動をしている身体の動きや用具も含めて、刻々と変化する位置を測定し、記録する方法の一つとしてビデオ撮影がある。自分のフォームをビデオで撮影し、フォームのチェックをすることや、上手な人のビデオをみて、技術を研究することは一般的に行われていることである。通常のビデオは毎秒30コマであるので、試合の様子を把握することや、おおまかな身体の動きを調べるためにはとても便利である。しかし、フィギュアスケートのジャンプなどを調べる時は、毎秒30コマでは十分ではない。毎秒30コマで撮影してコマ送りで調べるとジャンプで重要な踏

切の瞬間の映像がなかったりする。スポーツ動作では身体や用具が高速で動く場合がおおく、ハイスピードビデオカメラを用いて撮影することによって詳細なデータを出すことが可能となる。

ジャンプ動作の撮影には2台のハイスピードビデオカメラを用い、異なる2つの方向から毎秒250フィールドで同期撮影を行い、DLT法により3次元座標を求めている。

3. ジャンプの種類

フィギュアスケートは採点競技で各種の要素に対し評価を完全数値化して、絶対評価とする方法となっている。要素にはジャンプ、スピン、ステップ、スパイラルがあり、男子フリープログラムでは14個の内8個、女子フリープログラムでは13個の内7個のジャンプ要素を入れることができる。ジャンプの占める割合が高く配点が高いことからジャンプは重要な要素となっている。ジャンプの種類には、トゥループ、サルコウ、ループ、フリップ、ルッツ、アクセルの6種類があり、それぞれに回転数に応じてシングル、ダブル、トリプル、クワッドがある。ジャンプは右利きの選手の場合、踏切後に身体を上から見て反時計回りに回転させながら跳び、右足のバックアウトで着地する。アクセルを除く5種類のジャンプは、後ろ向きに滑走して踏み切るが、アクセルだけは前向きに滑走して跳ぶため半回転多いジャンプとなる。

4. クワッドサルコウジャンプ

第71回全日本フィギュアスケートジュニア選手権大会の公式練習においてクワッドサルコウジャンプ（4回転サルコウジャンプ）に挑んで着地に成功した例と転倒した例についてのスティックピクチャーを図1に示した。スティックピクチャーからみると右効きの場合サルコウジャンプは左足のバックインで滑走しながら踏み切るジャンプであるが、着地成功例も転倒例も前向き状態で踏切（エッジが氷から離れた瞬間）となっている（C）。このことは踏切前にすでに回転が始まっていることを示している。また、着地は右足のバックアウトで行うが、両例とも着氷（エッジが氷についた瞬間）は前向きに降りていることが認められる（G）。着地成功例では前向きに着氷して、その後半回転して着地姿勢をとっていることが認められる。

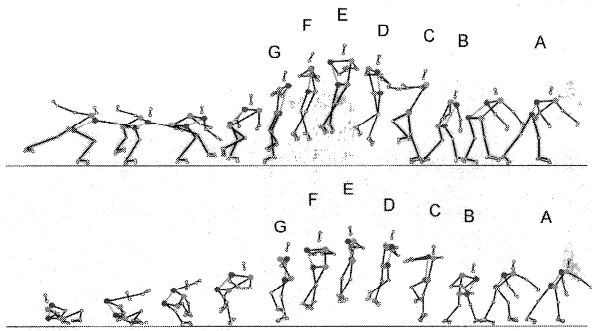


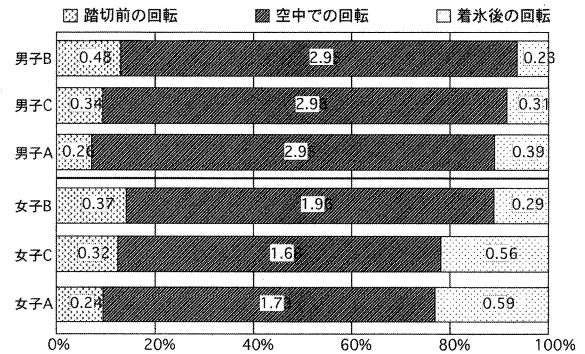
図1 クワッドサルコウジャンプの着地成功例と転倒例

5. 回転数

図2には日本人選手のアクセルジャンプについて回転数を示したが、空中での回転は女子の2.5回転のダブルアクセルでは1.7から2.0、男子の3.5回転のトリプルアクセルではほぼ3.0回転であった。踏切前と着水後の回転数をみると踏切前に少なく着水後に多いパターン(男女A)とその逆(男女B)、さらに中間のパターン(男女C)がみられた。着水後の回転についてルールでは4分の1回転を超えてはならない、と規定されているが男子Bを除いて全員4分の1回転を超えていた。ハイスピードビデオ撮影によって詳細に分析するとこのような結果となるが、実際競技会においては厳密に減点されていないようである。身体は踏切、空中、着水後のすべての局面で回転していた。踏切前に角運動量を得る動作として身体のひねり動作が始まっていることを示している。

6. ジャンプを成功させるためには

フィギュアスケートは採点競技でジャンプの占める割合が高く配点が高いことからジャンプは重要な要素となっている。選手はより難度の高いジャンプに挑戦し、成功させようとする傾向がみられる。しかし、難度の高いジャンプに挑戦して失敗すると、ジャンプの基礎点が低くなり、



※女子はダブルアクセルジャンプ 男子はトリプルアクセルジャンプ

図2 アクセルジャンプの回転

転倒すればさらに減点となる。従って着地に成功する確実性の高いジャンプを取り入れることが必要である。

フィギュアスケートのジャンプは回転を伴った空中動作であり、跳ぶことと回転することを同時に行うところに特徴がある。これまでの研究から回転数の多いジャンプを成功させるためには2つの条件が必要である。1つは、空中で必要な回転を得なければならないため、滞空時間が長い必要がある。滞空時間は跳躍高に依存するので、より高いジャンプが要求される。ジャンプ高を得るためには大きな垂直初速度が必要になる。2つ目に、回転数が多くなるほど必要な回転を空中で終了させるために踏切時における身体の回転速度が大きくなければならない。これは踏切動作でより大きな身体の角運動量を得なければならないことを意味する。踏切動作において、より大きな垂直初速度と角運動量を同時に得ることは一般的に困難であろう。基本的に両立の困難な2つの条件を実現させなければならないことがフィギュアスケートの多回転ジャンプが高難度な理由となっている。高難度のジャンプの成功率を上げるためには、まずは滞空時間を確保することであろう。そのためには垂直初速度を高めて跳躍高を得ることである。

中京大学アイスアリーナオーロラリンクとサーキットトレーニングガーデン

湯 浅 景 元 (中京大学スケート部長・中京大学体育学部教授)

中京大学豊田キャンパス(豊田市貝津町)に建設を進めてきた中京大学アイスアリーナオーロラリンク(写真1)とサーキットトレーニングガーデンが完成した(写真2)。



写真1:アイスアリーナの外観

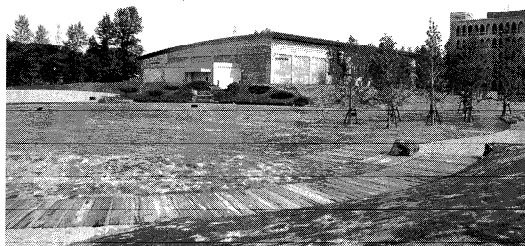


写真2:トレーニングガーデン

07年5月18日に起工式が、そして翌19日には披露の式典(写真3)とエキシビション(写真4)が行われた。19日に参加した人たちは、安藤美姫選手(中京大学体育学部2年生)、浅田真央選手(中京大学附属中京高校2年生)、小塚崇彦選手(中京大学体育学部1年生)らが出演したエキシビションがお目当てだったであろう。300名の観客は世界トップ選手らの演技に魅了され、2時間のエキシビションを堪能したようであった。



写真3:中京大学総長理事長梅村清弘氏のレセプション挨拶

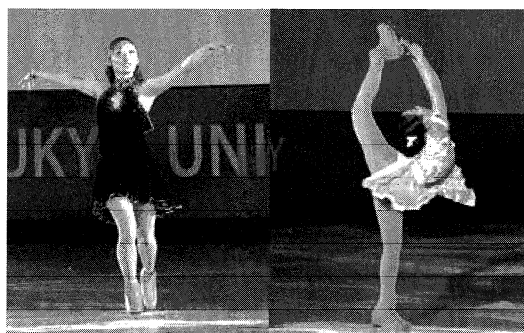


写真4:エキシビション

中京大学に完成したアイスアリーナとトレーニングガーデンでのこれからの活動は、東海地方のフィギュアスケートに関わる選手、指導者、研究者らにも何らかの影響を及ぼすことが考えられる。関係する方たちに、これらの施設を知っていただきたいと思い、本稿では新たに完成した2つの施設の概要について紹介する。

オーロラリンク

1) 施設

中京大学アイスアリーナは、鉄筋一部鉄骨造り2階建てであり、延べ面積は3,669㎡ある。オーロラリンクの大きさは60m×30mであり、国際競技規格を満たしている。観客席は300席である。氷の厚さは8cmで、氷の状態はフィギュアスケートに合わせて管理されている。氷上整備車は2台あり、安全などを確保するために、氷上の整備に努めている(写真5)。



写真5:氷上整備車

2) 専用

何はともあれ、このリンクの最大の特徴はフィギュアスケート専用のリンクだということである。「文部科学省統計要覧 平成18年度版」によると、国内にある屋内アイススケート場は51、屋外アイススケート場は104か所である。そのほとんどは多目的であり、同じスケート場でフィギュアスケート、スピードスケート、アイスホッケーなどの多種多様な氷上スポーツが行われる。フィギュアスケート専用のスケート場はなかった。

氷の硬さなどは種目によって異なる。このために、これまで、フィギュアスケート選手たちは最適な氷の状態での練習することはまれであった。この専用リンクの完成により、フィギュアスケート選手たちは最適な氷の上で練習を行うことが可能になったのである。

しかも、中京大学アイスアリーナは通年の利用ができる。どのスポーツにも当てはまることであるが、競技力を向上させるには、練習やトレーニングの場が一年中確保できることが必要である。このアリーナの完成により、フィギュアスケート選手たちは、通年、氷の上で練習できるようになった。

3) 拠点

大学は社会への貢献にも寄与しなければならない。その一環として、中京大学アイスアリーナオーロラリンクをフィギュアスケートの強化拠点にすることを、建設前から検討してきた。その結果、5月18日に2010年バンクーバー五輪に向けた文部科学省のナショナルトレーニングセンター競技別(フィギュアスケート)の強化拠点に指定された。これにより、中京大学所属のフィギュアスケート部員だけでなく、学外の強化選手たちに練習の場所を提供できるようになった。強化選手を受け入れるためには、練習期間中の滞在場所の提供も重要な条件となる。現在、96名が宿泊できる宿舎をアリーナに隣接して建設しており、今年の7月には完成予定である(写真6)。

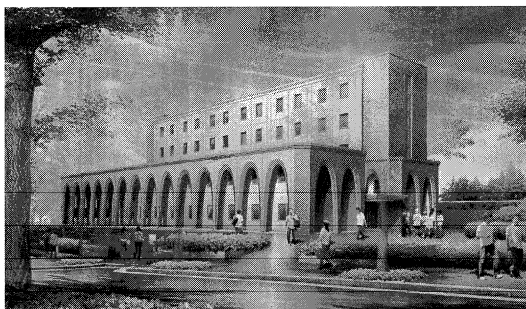


写真6:宿舎

4) 研究

大学内にアイスアリーナが建設されたことと、強化拠点に指定されたことから、このアリーナ内にはフィギュアスケートの研究が行えるように設備や機器の完備を進めている。著者がまとめ役になり、中京大学体育学部や中京大学生命システム工学部などに所属する教員らで研究プロジェクトをつくり、フィギュアスケート研究の拠点となることを目指している。

トレーニングガーデン

アイスアリーナの横に、サーキットトレーニングガーデンを新たにつくった。

フィギュアスケート選手たちは、高度な動的バランス能

力が要求される。この能力を高めるための方法として、中京大学フィギュアスケート・フィジカルトレーナーであるカルロス・アビラ・デ・ボルボ氏の助言により、このトレーニングガーデンをつくったのである。

1) 傾斜路

トレーニングガーデンには、傾斜角度が1.5度と2.0度の走路が設けてある(写真7)。この走路でランニングなどを行うことにより、動的バランス能力に必要な脚力などを鍛えることを目指している。



写真7:傾斜路

2) 路面

トレーニングガーデンの路面は土、木、砂、弾力性に富む人工芝など、数種類でできている(写真8)。それぞれの路面を利用したトレーニングにより、動的バランス能力の向上が図られている。



写真8:さまざまな材質でつくられた路面

3) 風景

スポーツ選手たちには、心安らく時間をもつことも欠かせない。そのためには、心を落ち着かせてくれる環境を整えることが必要だ。このトレーニングガーデンは川や樹木や花、そしてそこに集まる昆虫や鳥などで満ちている(写真9)。こういった環境が、選手たちの心理状態を良好に保つのに役立つことを期待している。

中京大学アイスアリーナオーロラリンクとサーキットトレーニングガーデンが、多くの人たちに活用されることを著者は願っている。



写真9:自然豊かなトレーニングガーデン

【お知らせ】

庶務委員会からのお知らせ

庶務委員長 高橋 義雄

1.東海体育学会の役員

幹事の坂口俊哉会員に代わり、平川武仁会員(所属:南山大学)が理事会にて新任されました。

氏名	役職	所属先名
寺田邦昭	会長	
池上康男	理事長	名古屋大学総合保健体育科学センター
石垣 享	学会○	愛知県立芸術大学
石田浩司	編集◎	名古屋大学総合保健体育科学センター
種田行男	編集	中京大生命システム工学部
春日晃章	編集○	岐阜大学教育学部
北川 薫	編集	中京大学体育学部
小林培男	学会◎	日本福祉大学福祉経営学部
斉藤 満	企画	豊田工業大学
酒井俊郎	広報	浜松学院大学短期大学部
庄司節子	企画	名古屋経済大学法学部
杉浦春雄	学会	岐阜薬科大学
高橋義雄	庶務◎	名古屋大学総合保健体育科学センター
坪田暢允	企画	名古屋学院大学経済学部
鶴原清志	編集	三重大学教育学部
中路恭平	会計◎	南山大学人文学部
秦 真人	編集	愛知学泉短期大学
藤井勝紀	企画◎	愛知工業大学
村瀬智彦	企画○	愛知大学法学部
八木規夫	広報	三重大学教育学部
山本英弘	広報○	朝日大学法学部
吉田和人	企画	静岡大学教育学部
吉田文久	編集	名古屋短期大学
來田享子	広報◎	中京大学体育学部
秋間 広	監事	名古屋大学総合保健体育科学センター
小澤教子	監事	名古屋女子大学
平川武仁	幹事	南山大学人文学部

(◎委員長、○副委員長)

2.東海体育学会役員選挙

平成19年度は東海体育学会の役員選挙が開催されます。東海体育学会会則(役員選挙:第29条～第33条)に従い、東海体育学会会長および理事候補者の選挙を実施します。郵送投票と総会時の投票による2段階選出法が適用され、最終的には、今年10月20日(土)に東海学園大学三好キャンパスで開催される学会大会

において会長および理事が決定されます。今回は郵送投票による要項が会報に同封されています。投票要項に従い、7月27日(金)までにご投票ください。

3.会員の消息(平成19年5月18日現在)

※新入会員

横山慶子(名古屋大学大学院)
 岩間英明(裾野市立西中学校)
 辻本典央(名古屋大学大学院)
 鈴木一成(愛知教育大学附属名古屋小学校)
 大金朱音(国立長寿医療センター研究所)
 木戸康裕(三重大学大学院)
 三浦雅季(上越教育大学大学院)
 望月知徳(浜松大学)
 辻本尚弥(久留米大学健康・スポーツ科学センター)
 杉浦弘通(鈴鹿医療科学大学保健衛生学部)
 久保田治助(名古屋大学大学院)
 大久保幸廣(静岡県藤枝市教育委員会スポーツ振興課)
 居崎時江(大垣女子短期大学幼児教育科)
 近田彰治(中京大学大学院)
 塚田卓巳(中京大学大学院)
 中里浩介(中京大学大学院)
 梅原大介(愛知教育大学大学院)
 百々正浩(個別指導塾アロー)
 豊島進太郎(東海学園大学人間健康学部)
 元晶煜
 菅野昌明(株式会社エム・スポーツコンサルティング)
 玉城将(静岡大学教育学部)

※転入会員

館俊樹(静岡県総合健康センター)
 福ヶ迫善彦(愛知教育大学)
 高根信吾(富士常葉大学)
 中野貴博(名古屋学院大学人間健康学部)
 河野清司(中京女子大学)
 鈴木俊輔(袋井養護学校)
 黄漢年(中京大学大学院)
 長岡由紀子(浜松大学)
 高橋和文(金城学院大学現代文化学部)

大橋晃(星城高校)
岸本卓也(豊橋市立石巻中学校)
新海宏成(名古屋大学大学院)

※所属機関変更

小粥由美子(中京大学付属中京高校)
河村正則(愛知文教大学)
下山順一(静岡県立伊東高校)
吉田正((有)ファミリースポーツクラブ)
西村美佳(大阪女子短期大学幼児教育科)
小野隆(岡崎女子短期大学)
金興烈(国立長寿医療センター疫学研究部)
溝口紀子(静岡文化芸術大学文化政策学部)
伊藤三洋(桑名北高校)
春日晃章(岐阜大学教育学部)
神事努(国立スポーツ科学センタースポーツ科学研究部)
原田祥子(富山市立月岡中学校)
(苗字変更 旧姓 中村)
大勝志津穂(愛知東邦大学経営学部)
本田亜紀子(国立スポーツ科学センター)
田中望(中京女子大学→所属なし)
中山健(富士常葉大学)

※転出会員

水上博司(日本大学文理学部)
猪崎弥生(お茶の水女子大学)
田原淳子(国土館大学体育学部)
若山裕晃(萩国際大学)
垂井彩未(武庫川女子大学)
井上一生(国立岩手山青少年交流の家)
岡田隆造(大阪国際大学短期大学部)
藤原寛康(生涯スポーツ健康科学研究センター)

※退会

伊東順子
大内敬哉
大塚泰之
小林義雄
坂田敏行
竹本洋
宮嶋孝治
行元博文
大北英紀
御手洗玄洋

浅野政人
高橋結香
前田優
菅野淳
斎藤正晴
加藤幸久
十代田光俊

4. 日本体育学会への登録・訂正等

日本体育学会会員の方は名簿に訂正箇所がありましたら、学会員名簿や体育学研究の折り込みの用紙を利用して、日本体育学会に訂正を依頼して頂きたいいたします。

東海体育学会のみの会員の方は東海体育学会事務局にお知らせください。

5. 学会費の納入

日本体育学会会員の方は、預金口座振替による自動振込をご利用頂きたくお願いいたします。自動振込の申請用紙が必要な方は東海体育学会事務局にご請求ください。東海体育学会のみの会員の方は東海体育学会の郵便振替口座に年会費3,500円を納入ください。

6. 東海体育学会事務局

東海体育学会事務局の電話番号とFAX番号が変わりました。FAXは専用回線がなくなり、南山大学総務課の番号を使用させていただくことになりました。つきましては、FAX利用の際は、「東海体育学会事務局宛」であることを明記してください。また可能な限りEメールや郵便を利用するようにお願いいたします。

東海体育学会に対するご意見、ご希望等ありましたら、以下の事務局にご連絡ください。

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

南山大学 体育学教室内 東海体育学会事務局

TEL 052-832-3110(5341)

FAX 052-833-6985

E-mail:tspe@htc.nagoya-u.ac.jp

東海体育学会 郵便振替口座番号:00870-8-41336

編集後記

今年度の会報をお手元にお届けいたします。内容に関する昨年からの変更点は、2点あります。第一は、理事会・総会議事録を掲載せず、その分の紙面に特集記事をお寄せいただいたことです。上記会議の議事録は、学会の研究誌に掲載されますので、そちらをご参照ください。

特集は、東海地区に大学施設としてのアイススケートリンクが開設されたことを受け「フィギュアスケートの科学と施設」といたしました。長野や北海道といったウインター・スポーツに適した地域ではなく、この東海地区に、こうした施設が作られ、選手養成はもとより、体育・スポーツ科学に新たな展開が見られることを望んだテーマです。

変更の第二点は、これまで次回学会大会実行委員長によるご案内のみであった記事に、大会開催要項および発表申し込み要項を加えたことです。別紙によるご

案内だけでなく、会報にこれが記載されることにより、会員の皆様にご利用いただきやすいことを目指しました。このために、大会実行委員会の方々には、これまでよりも早期にこうした要項が作成されるよう準備を行っていただきました。

この他、研究室訪問、国際情報、各種委員会報告などの原稿執筆にご協力いただき、充実した紙面作成ができました。お忙しい中、執筆・校正の労をお取りいただいた方々に感謝いたします。

次号以降も会員の皆様の様々な情報を掲載したいと考えておりますので、情報のご提供をお願いいたします。最後に、本会報は株式会社ミニミニのご支援をいただきまして発行することができました。お礼申し上げます。

広報委員会委員長 來田 享子

東海体育学会会報 No. 80

発行日 2007年6月20日 発行 東海体育学会 編集 広報委員会
事務局 〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18 南山大学 体育学教室内 東海体育学会事務局
TEL 052-832-3110 (5341) FAX 052-833-6985
E-mail tspe@htc.nagoya-u.ac.jp
ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/tspe/>
